



艶怪百物語

えんかい
ひやくものがたり

著 咎夜

絵 Atori

恐怖が官能に塗り替えられる物語

灯火がひとつ消えるたび、

前編

（なに、これ……？）

どこから現れたのか分からないその手は、絵美えみの顎あごを撫なでながら支え、親指を口の中に押し込み、そして宥なだめるかのように舌の上をぬるりと優しく撫でた。

「ふあ……っ」

そっち方面の知識に疎い絵美もその動きに性的なものを感じ、体がカッと熱くなる。

「手はさらに増えて、今度は彼女の胸を狙った」

語り手がそう言うと、絵美の胸にもう一本、手が忍び寄った。

咄嗟にパーカーの前を掻き寄せて握り込むが、新たな手は服など存在しないかのように容易くすり抜け、肌へ直接触れてくる。

「……っ」

恐怖で固まっていると、手は掌に収まりきらない絵美の乳房を下から掬うように持ち上げ、掌全体でゆっくりと形を確かめるように揉みしだいた。

男女経験のない絵美にとってはそれは未知の感覚で、不気味な手によるものということもあり、悍おぞましさを感じてしまう。

（これって幻覚なの——？）

＊

＊

＊

屋根付きの屋外ダイニングでは、BBQコンロで肉や野菜を焼いている者、テーブルに皿や箸を用意する者、飲み物を用意する者、食事ができあがるのを席で待っている者に別れ、それぞれ談笑していた。

そんな中、絵美は1人で野菜を切っていた。

施設側がカット済みの野菜と肉を用意しているため、自分たちはそれを焼くだけで済むのに、食べ盛りの男子が「足りなくなるかもしれないから」と自分たちで持ち込んだ食材があり、絵美は率先して包丁を手にした。

「宮野^{みやの}さん、手伝うよ」

そう言っ^{みずたに}て、このイベントの主催者の水谷先輩が絵美の隣にやってきた。

「谷口^{たにぐち}のやつ、自分で『足りないから』って言って用意したくせに人任せにするなんてな」

と、水谷先輩は溢^{こぼ}し、カボチャの切り分けに手を付けた。

「ははは……あ、ありがとうございます」

自分で用意した野菜を放置してトン^{なべぶぎょう}グを手鍋奉行ならぬ、BQ奉行をしている谷口先輩を見て絵美は愛想笑いを返し、女性には手強いカボチャを進んで切ってくれる水谷先輩に感謝を口にした。

その後の会話が続かない。

ちよっと気になっていた先輩の思いがけない接近に絵美はドキドキしていたが、水谷先輩は「固^{かた}たいなあ」と言いながらカボチャに集中していて、話しかけられなかった。

今日泊まる場所は、古民家をリノベーションした一棟貸し切りのグランピング施設で、大学のイベントサークルの催し^{もよお}として、男子六人、女子六人の合計十二人の男女が一泊することになっている。

もちろん、寝る部屋は男女別ではあるが、女子校出身で男女の青春とはほど遠い十代を過ごしていた絵美は、男子が自分のすぐ近くにいることに慣れておらず、少し緊張していた。

（せっかくのチャンスなのにな……）

彼とは、ここに来るまでの道中、車内でそれなりの時間を共有したというのに——未だに慣れず、せっかく仲を詰める絶好の機会を無駄にしている自分を嘆^{なげ}いた。

絵美は、ふと車で見た水谷先輩を思い出す。

爽やかでありながらクールさも垣間見える先輩に似合った、白くオシャレな車。同乗したメンバーたちと笑顔で会話をしながらも、時折、真剣な横顔でハンドルを握っていた。

車をバックさせるとき、助手席に左腕を回して振り返る姿。半袖から伸びた腕は筋肉質で、ゴツゴツした男の——自分とはまったく違う手の印象が強く残っている。

絵美は、隣でカボチャと格闘している先輩の手をちらりと盗み見た。

頑丈な皮をねじ伏せるように力が込められた左手は、大きくて骨張っており、薄っすらと青い血管が浮き出ている。包丁を握る

右手は、指先こそしなやかに伸びているものの、やはりゴツゴツと硬そうで――

（触ったら……どんな感触がするんだろ……？）

「ふはっ。宮野さん、すげえ小さく切るじゃん。野菜炒めでも作るの？」

突然降ってきた先輩の声に、絵美は我に返った。

見れば、ぼんやりしていたせいで、手元の野菜はBBQには到底向かないほど小さく刻まれていた。

「先輩のだって人のこと言えないじゃないですか。煮物でも作りますか？」

そう言い返した絵美の視線の先で、水谷先輩が切ったカボチャ

が、厚さも形も不揃いなゴロゴロとした塊になっていた。普通なら薄い半月切りにするはずなのに、どう見ても乱切りだ。

「あ、本当だ。……これじゃあ、中まで火が通らないか」

「ふふっ。私のは、網から落っこちちやいそうです」

「炭の仲間入りになりそうだね」

二人してまな板の上に歪いびつなカット野菜を量産してしまい、どちらからともなく笑い声が漏れた。

（こんな風に笑うんだ……）

車を運転していたときのような、クールで格好いい姿しか知らなかった先輩の意外な一面。それを見られたことに、絵美はたまらなく嬉しくなった。

「これ、どうでしょう？」

ふたりで生み出してしまった歪なカット野菜の使い道に絵美が困り顔を向けると、水谷先輩は「スープにでもするか」と小さく笑った。

「あ。じゃあ私、キッチンから鍋とカセットコンロ持ってきます！」

家の中へと勢いよく駆け出そうとした絵美を、先輩が「待って」と手を広げて制止する。

「ひとりで全部は無理だろ。一緒に行こう」

先輩はそう言うのと後を振り返り、手持ち無沙汰にしていたメンバーに向かって声を張り上げた。

「おい、その暇してるやつら！俺たち、台所から鍋持ってくるから残りの野菜切つて！ただし、まな板の上の悪い

見本だから、みんなはしつかりBBQ用にカットしといてよ」

「えー、もう焼けるのにい」

「文句なら食材を余計に持ち込んだ谷口に言え」

「今文句言ったやつ、あとで足りないって泣きついて俺の野菜……いや、肉も食わせねーからな！」

谷口が、グリル越しにトングを振り回す。

「うそうそ！ カット戦隊、行きまーす！」

そんな賑にぎやかなやり取りに絵美は、くすくすと笑った。

一緒にイベントサークルに入った友人の真希まきも、ちゃっかりその輪の中で男子たちと楽しそうに包丁を握り始めている。

（……これが、男女の青春ってやつなのかな）

女子高出身で、異性のいない十代を過ごしてきた絵美にとって、

このサークルは憧れそのものだった。積極的な真希とは違って自分はまだ馴染み切れていないけれど、今、その一部にいる。そう感じられて、絵美の胸が躍った。

「いこっか」

不意に、水谷先輩にぽんと肩を押された。

（うわっ……！）

急なスキンシップに全身がビシッと硬直する。心臓が跳ね上がったのをごまかすように、絵美は慌てて家の中へと足を動かした。視界の端で、こちらを見てこれ以上ないほどニヤニヤしている真希の顔を捉え、絵美の顔は一気に熱くなった。

キッチンで見つけた胡椒こしょうやコンソメを鍋の中に入れて運び出す

水谷先輩と一緒に、絵美もカセットコンロを運んだ。

皆の待つBBQサイトに戻ると、女子がクーラーボックスから缶ビールや缶チューハイを男子に手渡ししているところだった。テーブルにはすでに焼き上がった肉や野菜が盛られた皿が並べられていた。

「もう始まるぜ！」

BBQコンロに陣取る谷口先輩が、上半身だけこちらに向け、左手に持った缶ビールを掲げた。

絵美が慌ててテーブルにカセットコンロを置くと、女子のひとり**がぼそり**^{つぶや}呟く。

「元々の野菜が足りなくなっってから切ればいいのに。宮野さんヨリヨリつて要領悪いよね」

「あつ、そう：ですね」

俯いてしまった絵美の肩に水谷先輩の手がぽんと置かれた。

「俺はありがたいよ。宮野さんが真っ先に動いてくれたから、もう一品増えるんだ。スープ、女子も好きだろ？」

そう言つて庇^{かば}ってくれた。

「まあ、そうですけど……」

気まずそうに尻すぼみになる女子の言葉を遮^{さえぎ}るように、真希が両手にウーロン茶とビールを引っ提げてやって来た。

「スープもいいですけど、男子がもう待ちきれないみたいなんで、早く乾杯しましょ！」

真希からウーロン茶を受け取る絵美の横で、水谷先輩もビールを受け取る。

「サンキュ。おいそこ、一年生はソフトドリンクだからな」

「水谷いゝ、固いこと言うなよお」

ちゃっかりビールを受け取ろうとしていた一年生を見逃さず注意する水谷先輩に、谷口先輩が軽口を叩く。

「ダメだ。未成年飲酒がバレたら、サークルが終わるだろ」

「外には漏らさなきゃいいだけじゃん！」

そんな二人を見かねた真希が、パンツと手を叩いて声を張り上げた。

「はいはい！ それじゃあ、カンパーイ！」

B B Qと予想外に一品増えた急ごしらえのスープをみんなで囲い、夕食を楽しんでいると、辺りはすっかり真っ暗闇になってい

た。

「空の色が全然違うねえ」

お腹いっぱいになった者たちは、優しく奏でる夏虫の声を聴きながら、都会では滅多に見えない満天の星空を眺めて楽しんだ。

真夏だというのに山の夜は肌寒く、女子のほとんどは上着を羽織りだした。

絵美もパーカーの前を掻き合わせたが、それでもまだ肌寒さが抜けない。

施設の人がキャンプファイヤーを用意してくれていたが、暖を取るには心もとなかった。ただ、揺らぐ炎と木が弾ける音は、気持ち程度に一行を和ませてくれた。

やがて我慢の限界とばかりに、一行は駆けるように室内へと入

った。

古民家はリノベーションされていて、最新の空調設備により心地いい温度になっている。あちこちで、あんど気の抜けた安堵の音が漏れた。

しばらくその暖かさを堪能してから、リビングに移動すると、お決まりのレクリエーションタイムになった。

例年ならば、ここでボードゲームやカードゲームを楽しむらしいのだが……。

「百物語しよう！」

え、と皆がざわめいた。

「出たよ、調子谷」

真希が絵美にそう耳打ちした。

『調子谷』とは、谷口先輩のことだ。このサークルのリーダーである水谷先輩と並んで一目置かれる先輩なのだが、お調子者のせいで、そう呼ばれている。ちなみに水谷先輩のあだ名は『クール谷』。2人合わせて『谷コンビ』と呼ばれていて、今も一緒に並んで座っているくらいには仲が良い。

ただし、現在の水谷先輩は眉間に皺しわを寄せて、谷口先輩の顔を睨にらんでいる。

「おい、酔っ払い。勝手に予定を変えるな」

「けどよお、春も夏も秋も冬もボドゲしやれなんて飽きちまうぜ。夏なんだし、怪談話と洒落しやれこもうや」

「えゝでもお、幽霊の話をしていると幽霊が寄ってくるとか言うじゃないですかあ……私、怖いのが苦手でえ」

ビビリな女子が甘えた口調でそう言うと、まるで待ってました！と言わんばかりの輝く笑顔を見せた谷口先輩は、

「だからさ、『エロ百物語』をしよう！ エロい怪談話だったら怖くないっしょ！」

と、のたまった。

すぐに他の男子も「確かに！」「幽霊はエロが苦手らしいしな！」と乗っかりだした。

（あ、私も聞いたことある。幽霊は生命力を見せつけられると逃げてくんだっけ）

絵美は頭の中で相槌を打ちながらも、手放しで賛成する気には

なれなかった。

ただの怖い話なら怖い話で構わない。けれど『エロ』と冠かんむりがついた途端、話の中身よりも周りの反応の方が気になってしまいそうで……。

「それ、本当ですかあ？」と、件の女子くだんはまだ不安そうにしていたが、他の人たち——主に男子が「やろうぜ！」と盛り上がってしまった。

絵美もまた、断る理由を探しあぐねているうちに、その空気に呑のまれていった。

どこからか、赤いキャンドルを持ち出してきた谷口先輩が、「百物語だけど、百個も語ってたら朝どころか昼になっちまうから、五物語にするべ」

と、テーブルの中央に五つ置いた。

普通のロウソクよりも太く、重量感のある赤いキャンドルを見た真希が、絵美の耳元で囁いた。^{ささや}

「赤のキャンドルって……露骨すぎない？」

確かに百物語と言えば、細く白いロウソクのイメージがある。

赤いキャンドルが何を意味するのか分からなかった絵美は、小さく首を傾げた。^{かし}

「えっと……もしかしてエッチな目に遭わされるってこと？」^あ

「いや、水谷先輩もいるし、さすがにそんなことにはならないと思うけど、エロい空気を作って女子の反応を楽しむ気満々じゃん、あれ」

と、侮蔑^{ぶべつ}の視線を調子谷とそのシンパに向ける真希。

盛り上がっている男子の声に、水谷先輩が静かだが芯のある声を割り込ませた。

「せめて、女子は女子で固まって座ろう」

エロ百物語自体には真っ向から反対せず、せめてもの妥協案として、まるでお見合いのように男女で対面する形に落ち着く。

「どうせ電気も落とすんだろ？ 念のため、ボディーガードとして俺は女子の一番端に座しておく。反対側は森田^{もりた}、お前が座ってガードしてやってくれ」

グループの中でも頼もしく、勝ち気な真希を見込んでの指名だろう。苗字で指名された真希は「えー、まあいいけど」と苦笑いしながら了承した。

ちようど端っこにいる絵美と席を交換するのかなと思えば、

「じゃあ先輩、私の代わりに絵美を守ってくださいね」

そう言って、立ち上がった真希は反対側の席に向かった。

（え……）

「了解。じゃあ、宮野。そっちひとつ詰めて」

「あ、はい」

促されるまま、絵美は真希が座っていた隣の椅子へひとつ腰を移した。

（あ……）

その瞬間に悟って、絵美の心臓が大きく跳ねる。

自分が詰めたことでぽっかりと空いた、一番端の椅子に水谷先輩が座るのだ。

鼓動が速くなるのを悟られたくなくて、絵美は俯うつむきがちに視線を落とした。

腰を下ろすお気配、そしてふわりと香る先輩の匂いに、余計に意識がそちらへ引っ張られる。

すぐ隣に水谷先輩がいる。ただ、お互い一人用の椅子に座っているため、二人の間には手を伸ばさなければ届かないほどの、すっかりとした距離があった。

これなら緊張しすぎずに済むとホッとする反面、ほんの少しだけ残念に思ってしまう自分の身勝手さに、絵美は密かに苦笑した。

水谷先輩の指示に従い、皆が男女に分かれて座り直すなか、調子谷が茶化すように声を上げた。

「そんなこと言って、お前だけ美味しい思いをするつもりじゃねえだろうな!？」

「は？」

隣から底冷えする声が発せられ、絵美の体がビクリと跳ねた。

「お前、マジで調子に乗り過ぎ。みんなが楽しんでるから黙ってたけど、いい加減にしろよ」

本気で怒らせたと悟った谷口先輩は、慌てて態度を改める。

「ごめん！ 気をつけるからこのままやらせてくれっ」

「はあ……ほんと頼むぞ」

固まっている絵美に気づいた水谷先輩は、ふっと表情を緩めた。

「あ、びっくりさせちゃったかな。怖がらせてごめんね」

すぐにいつもの調子に戻り、少し困ったように笑ってみせる。

「あ、はい……」

（ちよつとだけ怖かったな……）

でも、それは絵美たち女子を守ろうとして怒ってくれたからだ。優しいだけじゃなく、怒るべきところで怒れる人で——ふと見せた、困ったように笑う顔とのギャップに、絵美の胸がきゅつと締めつけられた。

キャンドルに火が入り、リビングの電気が落とされると、

「わあっ」

と、悲鳴と歓声が混じったような声が上がった。

暗闇の中、赤い灯りが怪しく揺らいでいる。

「それじゃあ、最初は俺から……」
言い出しっぺの谷口先輩が、声のトーンをわずかに落として、
一つ目の怪談を語り始めた。

中編

暗闇に包まれた古民家で頼みの綱となるのは、テーブルに置かれた五つの赤いキャンドルだけだった。

谷口先輩が、そのうちのひとつを手取る。

下から赤く照らされたその顔は、いつもの人懐っこい表情とはまるで違う陰影を纏^{まと}っていた。

絵美の喉が、きゅつと締まる。

谷口先輩の顔しか認識できない暗闇の中、絵美はだんだんと本当に水谷先輩が傍^{そば}にいるのか不安になっていった。

「『三十になっても童貞のままだったら魔法使いになれる』って聞いたことあるだろ？ そいつは正しく三十の童貞だった。だが、魔法使いにはなれなかった。代わりに人には見えないモノが見えるようになったんだ」

と、谷口先輩は優しく語り掛けるように口を切った。

そして、次第に真剣みが増していく。

「ある日、男はベッドで寝ていると、重苦しさで目が覚めた。目を開けると、目の前に見知らぬ女がいた。女は男を誘うように体をくねらせた。それが凄く艶めかしい……な^{なま}にせ、女は裸だったから。なぜ、男の家に見知らぬ女がいるのか……そんな疑問は吹っ飛び、男は女に触れようとした——が、触れられなかった。男の手は女の体を通り抜けてしまったんだ」

「きゃっ」と、どこかで小さな悲鳴が上がる。

「よく見ると、女の体はほんの少し透けていた。女がこの世のものではないことに気づいた男は叫んだ——ぎゃー！」

「きゃー！」と、半分ノリも入った悲鳴が周りから上がった。

絵美は悲鳴こそ上げなかったが、谷口先輩の迫真の叫び声に体がビクリと跳ねた。

「だが、童貞を三十まで拗こじらせた男だ。しばらく観察して、女は誘うような目で見つめてくるだけで特に何もしてこないと判断し……その女幽霊の体をオカズに自家発電しだした……そんな男の姿に女はニヤリと笑い、より艶めかしく体をくねらせた——まるでナメクジのように」

「おーい、幽霊はエロが苦手で消えるんじゃないのかよ」

くすくすと、男子の野次が飛ぶ。

「それで言えば、『エロ怪談』の時点で矛盾してるけどな」

（あ……水谷先輩、ちゃんと隣にいる。……よかった）

思った以上に卑猥な話で絵美は戸惑ったが、すぐ隣から水谷先輩の声がして、絵美は少しほっとした。

「ぐっ……！ いや、違うんだよ。俺が言いたかったのは、その女幽霊がニヤリと笑った理由だよ。幽霊はさ、『生命力』そのものが狙いなんだ……！」

「……語るなら最後まで怪談として語れよ」

「だからっ……男は狂ったように自慰を繰り返したんだ。自分でもおかしいと思いながらも手が止まらなかった。男も女幽霊も一切喋らず、静かな暗い部屋にくちゆくちゆくという水音だけが響い

た」

「やだあ」と、周りから非難めいた声が上がった。

——くちゅくちゅ。

（……？）

谷口先輩の声ではない、リアルな水音が聞こえた気がした。

（気のせい……だよね……？）

込み上げる違和感を呑み込んで、絵美は先輩の語りに意識を戻す。

「ぬめり汁が男の股間を濡らした。それは異様な量だった。ぐちゅぐちゅと溢れ出し、男の手の甲までぐっちゃぐちゃになっていた。だが、男にはもうそんなことなんざ気にする頭は無く、欲望のままにしごき続け、それに合わせて息も上がっていく」

——ぐちゅぐちゅぐちゅ。

——はあはあはあ……。

（え、嘘……誰か自慰してる!?)

絵美の戸惑いをよそに、谷口先輩の話は続く。

「だが、男はなかなか達するまではいかず、男の手が激しくなるにつれ、女の体も異様さを増していった。さっき言った『ナメクジのようにくねらせる』って比喩ひゆじゃないんだ……ナメクジの生殖行為を知ってるか？ お互いの体を絡ませ、くねらせ、結合するんだ。女は人間の姿をしているのに骨なんてないかのように、ナメクジみたいに体を男に絡ませ、くねらせ——混ざりあった」

——ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ。

——はあはあつ、はあつ、はあ……つ。

（~~~~つ）

耐えきれず、絵美は目をつむり、耳を手で塞いだ。

しかし、消えない。

——ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ。

音は絡み合うようにどんどん速く、粘り気を増していく。脳に直接響かせているかのように水音がこだまする。

絵美の両手はまったくの役立たずで、谷口先輩の語りさえ阻はばむことができなかった。

「表情が一切変わらなかった女がその時、初めて満たされたように笑った」

——くすり。

女の笑い声が聞こえ、絵美のうなじがぞくりと粟立あわつ。

「数日後、男は死体で発見された。その体は、まるで道路で干からびたミミズやナメクジのようにカスカスになっていた——終わり」

谷口先輩が、手元のキャンドルにそっと息を吹きかけて火を消した。その瞬間、

——ふつり。

まるで糸が切れたように、すべての音が一瞬で掻き消えた。

「……………終わった……………？」

「終わったね。宮野さん、大丈夫？」

隣から気遣う声がした。どうやら、水谷先輩は絵美が谷口先輩の怪談に怯えていると思って声をかけてくれたようだ。

「あ……………はい、大丈夫です」

怖かったので、その心配は間違ってはいない。だけど、
（先輩には、さっきの聞こえてなかったの……？）

感想を言い合う男女の声を背景に、絵美はさっきの現象について
思いに耽ふけっていた。

「やっぱり、ああいうのは苦手？」

「……え？」

「さっき、宮野さんが耳を塞いでいるのが見えたんだ。嫌だった
ら抜けて部屋に帰っていいからね？」

（真っ暗なのに見えてたの……？）

驚いて隣に目を向けると、キャンドルの光源が当たっている先
輩の顔半分には、氣遣うわしげに眉を下げた表情が薄うつすらと浮か

んでいた。

いつの間にか絵美の目も暗闇に慣れ、目の前のテーブルや人影の輪郭が、影絵のようにほんのりと見えるようになってい

少しほっとして、

「……あの、さっき変な音が聞こえませんでした？」

「変な音？」

きょんとした声が返ってきて、絵美の胸がずっと冷える。

（本当に、聞こえてなかったんだ）

「いえっ、心当たりがないならいいんですっ」

絵美は、慌てて両手をブンブンと横に振った。

（やっぱり、幻聴………だったのかな？）

「じゃあ次は、私やるー！」

そうして二つ目の怪談が始まった。今度の語り手は女子だ。
キャンドルをひとつ手に取り、語りだす。

「お互いに映画が好きなのがきっかけで、付き合うことになったカップルがいたの。それで、映画館デートをしたわけ。カップル席なんてのも知らない初々しいカップルは、一般席の隣同士で座ったの。まだ付き合いたてで、手も握ったことがなかったのだけれど……」

（あ、普通っぽい？）

谷口先輩の怪談は出だしから猥談わいだん寄りだったので、普通に始まったことに絵美は安心した。

「途中、彼氏が横から手を伸ばしてきて、彼女の手にとつと覆いおお

重ねてきたの」

「きゃー♡」と、喜声が上がった。

絵美は、隣にいる水谷先輩を意識してしまう。

「ドキドキして、映画どころじゃなくなった彼女は、全神経が自分の手にいっちゃって……ほら、目を瞑ると五感が研ぎ澄まされるときも言うでしょ。そんな状態で彼がさわつと肌を撫でてきたの」

——さわり。

絵美は、自分の手の甲を何かに撫でつけられる感触がして、びくりと肩を跳ねさせた。

（えっ、まさか水谷先輩……？）

戸惑う絵美を置き去りにして、怪談は続く。

「彼女は『ちよつとやめてよっ』って小声で訴えたら——『え、

何が？』って彼が素^す頓^{とん}狂^{きやう}に返してきたの。悪ふざけしてるんだ
 と思った彼女は、いまだに自分の手を撫でる手に爪を立てて引つ
 掻いてやったのね。だけど、びっくりともしなかった。それどころ
 か、その手はもつと大胆になって、太腿まで撫でつけてきた」

——さわり。

何かが絵美の太腿にそつと移動し、撫でつける感触がした。

「あの……先輩……？」

「ん？ どうした？」

（先輩じゃないの……？）

怖くて、太腿のそれを確認できない。

助けを求めるように隣を見るが、水谷先輩は何も気づいていな
 い様子で怪談に耳を傾けている。

誰にも気づかれぬまま、絵美だけがこの異変に取り残されていた。

「調子に乗った手はふたつに増えた。増えた手は腰を纏わりつくように撫でて、反対側までいくと腰骨をぞわりと撫でつけた」

——さわり。

——ぞぞぞぞ、ぞわり。

絵美の腰にも纏わりつくように後から何かが回り込み、腰骨を撫でた。

「真っ暗だとは言え、そこは映画館。さすがに公共の場でこの目に余る行為に、彼女は注意しようと彼の方を向いた。……でも、変なの。隣にいる彼女の腰に腕を回したら、彼の体はこうぐつと彼女のほうに傾くはずでしょ？ 彼は真っ直ぐ座っていたの……」

じゃあ、この手は誰の手？」

「ひえっ」と、小さく悲鳴が上がる。

絵美も悲鳴を上げそうになった。なぜなら——水谷先輩もまた、真っ直ぐ座っていたから。

「彼氏の手じゃないことに気づいた途端、今まで彼の方向から伸びてきていた手はたが箍が外れたように後ろから、前からと、どこからともなく伸ばされた。後ろからの手にうなじを撫でつけられて、悲鳴が出かけると、前から宥めるように口の中に指が入ってきて、彼女はパニックになった」

絵美のうなじを何かが、さわりと撫でつけた。

悲鳴が出かけると、口内に何かが入ってくる。

「ふぐっ」

サンプルはここまで

続きは製品版からどうぞ。

艶怪百物語
とがよ
著・咎夜